始さんの年も越えて

田中芳樹『創竜伝1　超能力四兄弟』（講談社ノベルス）

私が育った町の図書館は、本を「おとな向け」と「こども向け」のコーナーに分けていた。小学校を卒業した年の春、背伸びするような気持ちで「おとな」のコーナーに足を踏み入れ、田中芳樹さんの『創竜伝』第一巻を手に取った。つまり私にとって、講談社ノベルスは「おとな」の本第一号なのである。――そして、実際に大人になった今、選んだのが『創竜伝』で本当によかった、と思う。以来、私は「こんなにおもしろいなら」とノベルスの判型を中心に本を探し、読むことになる。

当時、同年代の本好きの間で田中さんの名前は別格で、私たちは主人公・竜堂兄弟にほとんど恋していた。「今、末っ子の余くんの年だけど、あんなかわいい子いないよね」とか、「終くんが人気だけど私は断然、続さん！」とか。その後、自分が長兄の始さんの年を追い越す日

が来てしまうなんて想像もしていなかった頃の淡い記憶だ。「始さんの年を追い越した」こと一つとっても、長年の友人のように彼らの名前を呼び、本を傍らにおいてこられたことは、ものすごく誇らしい。

私にとっての講談社ノベルスは、そんなわけで『創竜伝』シリーズと、もう一つ、これは講談社文庫で出会って衝撃を受け、ノベルスで追いかけ始めた綾辻行人（あやつじゆきと）さんの『館（やかた）』シリーズ。『冷たい校舎の時は止まる』でメフィスト賞を受賞し、その二つと同じ講談社ノベルスから本が刊行された時、私がまず嬉しかったのが、背表紙にある著者名のカラーリングだった。

講談社ノベルスは、背表紙の著者名が「あかさたな」によって色分けされているのだが、私の筆名「つじむら」は、田中先生と同じ「赤」。本棚の『創竜伝』の横、同じ配色で自分の本が並ぶのを見て、どれほど嬉しかったか。

そして、その配色が実現する要因となった『辻村』の『辻』は綾辻さんから（勝手に）一文字拝借してつけたもの。私の血の主成分は、やっぱり講談社ノベルスでできている。私はノベルスの子どもなのだ。